

赤レンガとしておなじみの

北海道庁旧本庁舎

いつも多くの市民や観光客が訪れる北海道庁旧本庁舎。赤レンガとして親しまれているこの建物が、今の姿に至るまでの歴史を紹介します。

北海道庁旧本庁舎が建てられたのは、明治二十一年（一八八八年）のこと。他府県と比べて群を抜いて豪華な庁舎でした。多額の建築費は、開拓長官の岩村通俊いわむらみちとしが、着任早々、緊縮財政の中から工面しました。その豪華さは、十六年（一八八三年）に東京で建てられた有名な社交場「鹿鳴館」ろくめいかんの建築費を上回っていたことから分かります。

建物の形は、ナポレオン三世統治下のフランスで始まり、世界的に流行していたネオ・バロック様式で、道庁の技師の手で建てられたといわれています。道産の資材がふんだんに使われ、道産子自慢の建物でした。

特に屋上のアメリカンスタイルの大ドームは、人気がありました。しかし、これは当初の設計にはな

かったものを、岩村長官のアイデアで急に取り付けたといわれており、構造的に無理があったようです。このため、強風が吹くと揺れ、それが下の本屋に響き、また、雨もりもひどくなったことから、七、

八年あとは、撤去されました。

池にカモが浮かぶ風景が見られる前庭は、今は、庭園として整備されていますが、昭和四十三年の復元改修工事前は、もつと実用的なものとされていたようです。池は、防火用水とされ、そのほとりの巨木の群れも試験林・見本林として植栽されたもので



明治21年に新築されたころの北海道庁舎
(北海道立文書館所蔵)

した。この池では、明治二十四年（一八九一年）に札幌農学校に着任した新渡戸稲造が、留学先のアメリカからスケートを持ち帰り、学生たちに滑り方を教えたという話も伝えられています。

明治四十二年（一九〇九年）には、原因不明の大火事がありました。二年後には庁舎は復旧しましたが、この事件は、火災当時の写真が、絵はがきになって売られ出したほど注目を浴びました。昭和四十二年に北海道の現庁舎ができると、旧庁舎は、開道百年を記念して保存されることになり、長らく取り外されていたドームも復元されました。



明治42年に北海道庁舎が全焼した翌月の写真
(北海道立文書館所蔵)

四十四年には重要文化財に指定され、今もその雄大で美しい姿で、開拓の歴史を伝えてくれています。

(平成十二年一月号・第六十四回)



昭和37年（昭和43年の復元前）の北海道庁舎
(北海道立文書館所蔵)